Ⅳ－5　地方空港の国際化における地域住民の潜在意識の変化

秋田大学　学生会員　○鈴木　歩
秋田大学　フェロー　清水　浩志郎
秋田大学　正会員　浜岡　秀勝

1．はじめに

全国でも出国率の低い秋田県に2002年10月、国際定期航路、秋田―仁川（インチョン）便が就航した。それにより、秋田空港と韓国の仁川空港が約二時間半で結ばれ、観光やビジネスなどで多くの人が秋田と韓国及び他の国々を行き来することが可能になった。そして、就航により海外旅行という新しく、今まであまり親しんだことのないものが私たちの生活に浸透し、遠いと感じていた韓国が実際には近いことがわかった。

本研究では、今まで感じていた距離と実際の距離の差、韓国への旅行経験等を比較する。また、秋田空港国際化により海外に行きやすくなったと思われているが、これらから実際本当に海外に行きやすくなったのかどうか把握するため、海外・国内の旅行経験からアクセス面、意識距離や満足度などの比較をする。

またこれらを総合的に比較することにより、秋田空港の国際化に伴い、今まで海外に行く機会の少なかった秋田県民の海外旅行に行く前後で変化する潜在意識の変化を把握する。

2．秋田空港国際化による意識変化について

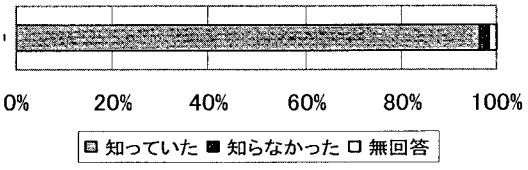
秋田空港利用者が海外旅行へ行く前後でどのような意識が変化をするか把握するため、海外旅行者を対象に出国前後でアンケート調査を実施した。そのアンケート調査概要を表．1に示す。また、秋田空港の国際化により空港の利便性が向上した地区を把握するために、県内7地区の住民もアンケート調査対象とした。秋田空港で配布するアンケートには出国者と帰国者に対する両アンケートに郵便番号と生年月日の回答欄を作り照らし合わせを可能にした。その結果、旅行前後のサンプルとして、35人の照らし合わせが可能となった。

表．1　調査概要

調査日	平成12年12月		
対象者	出国者	帰国者	地域住民
データ数	241人 （男53%、 女47%）	79人 （男59%、 女41%）	171人 （男60%、 女40%）
回収率	－	29%	17%

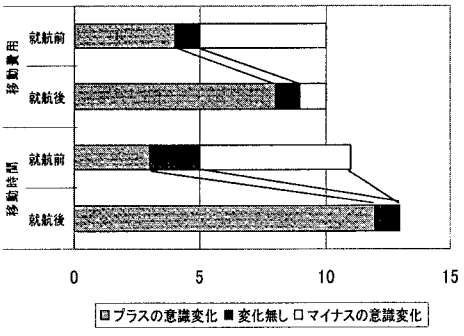
3．秋田－仁川便の就航について

図．1は地域住民171人より得られたデータから仁川便就航の認知について抽出したものである。現在、秋田－仁川便が就航して一年以上経過していることもあり、秋田県内のどの地域の住民も秋田－仁川便の就航を認識していることが把握できた。



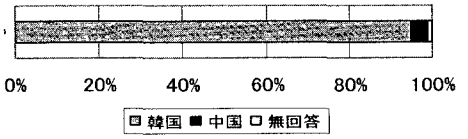
図．1　仁川便就航の認知度

また、図．2より移動時間と移動費用を就航前後で比較すると、アクセス面が向上したことがわかる。ここで、プラスの意識変化とは満足度が向上したことをいう。



図．2　就航前後でのアクセス面の変化

また、図．3より帰国者79人の旅行の目的地を示した。これより、韓国への旅行者の利用率95%と高いが、国際ハブ空港である仁川空港をトランジットとして利用する旅行者はほとんど見受けられなかった。仁川空港をハブ空港として利用すると、秋田－仁川便の利用率は今後、増加すると考えられる。

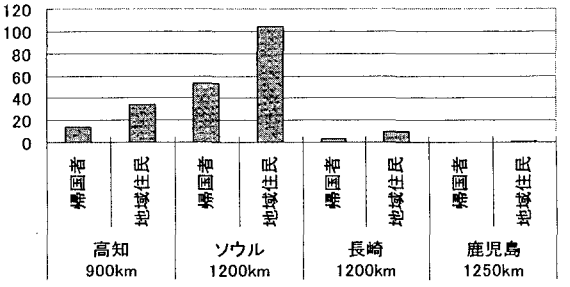


図．3　秋田－仁川便利用者の目的地

4．移動時間・距離と旅行経験の関連性について

図．4は帰国者と地域住民が高知、ソウル、長崎、鹿児島の4都市から秋田の都市間距離が一番近いと思う都市を選択してもらい、その人数を示したものである。その際各都市への旅行経験の有無を考慮し、帰国者と地域住民を対象として比較した。

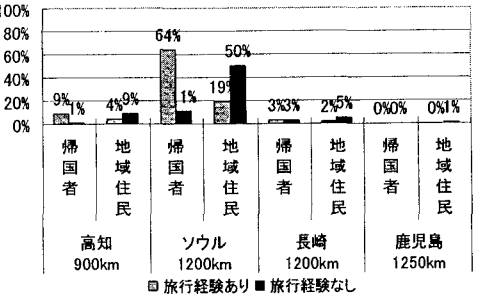
4都市は高知、ソウル、長崎、鹿児島の順に秋田からの都市間距離が長い。しかし、図.4より帰国者・地域住民はともに高知ではなく、ソウルが一番近いと感じている。これはソウルのみ秋田から直行便が就航しているためと考えられる。これより、都市間の距離ではなく、都市間の交通の便が意識距離変化の一要因と考えられる。



図．4　秋田市と4都市の距離の比較

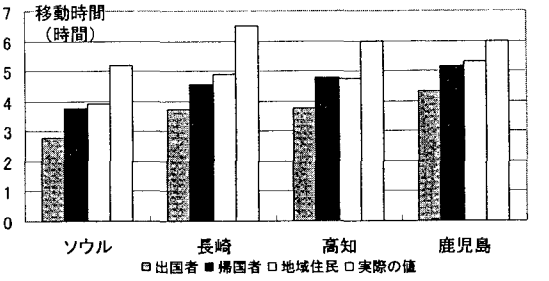
図．4において、単純に人数のみを見た場合、その結果、帰国者・地域住民の多くがソウルを選ぶことがわかった。次に帰国者と地域住民の旅行経験を見ると、ソウルを一番近いと感じた人の多くは、帰国者で旅行経験のあり、また地域住民では旅行経験のない人に多くあらわれた。

次に秋田駅からソウルの主要駅までの移動時間について出国者、帰国者、地域住民に想像上で回答



図．5　帰国者と地域住民の旅行経験

していただいた値を平均した。図．6 平均値の比較を示す。帰国者に着目すると、ソウルから帰国後、移動時間は出国者の平均値と比べると4都市全てにおいて増加している。帰国者にはソウルが近いと感じている人が多く（図．3参照）、ソウルへの旅行により、実際の移動時間を肌で感じ、意外に移動時間がかかったため、ソウルより遠いと感じている3都市は、出国前に想像した時間よりさらに時間がかかるのではないかと思い、韓国へ旅行する前後で移動時間が増加したと考えられる。また、帰国者より地域住民の方が予想移動時間が長くなる。



図．6　各被験者における予想移動時間の平均と実際の時間

5．まとめ

今回は移動距離と旅行経験について比較した。つまり、旅行経験の有無が、帰国者の行った場所を身近に感じさせることがわかった。そこで、今後はこのような時間的な距離だけでなく、意識距離と旅行経験との関係を明らかにしたいと考えている。

【参考文献】

1）森地　茂、轟　朝幸；海外観光旅行需要の国内地域格差構造と将来動向